



Title	2024年「臨床心理発達相談室」活動報告
Author(s)	安達, 潤; Adachi, Jun
Citation	臨床心理発達相談室紀要, 7, 69-70
Issue Date	2025-03-24
DOI	https://doi.org/10.14943/RSHSK.7.69
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94634
Type	departmental bulletin paper
File Information	06_2434-7639_7_69-70.pdf



2024年「臨床心理発達相談室」活動報告

安達 潤*

Activity Report 2024

Jun ADACHI

はじめに

本稿は2024年の「臨床心理発達相談室」活動報告である。

2019年に始まったコロナ禍は2023年を経て2024年に至り、その良否は別として身近にあるものとなった。その結果、医療機関など一部の空間での制限はありつつも、多くの日常スペースではそれぞれの防衛策をそれぞれの判断で、それぞれの意思で行う状況となった。

相談室においても、この状況変化に応じて、相談室活動を継続してきている。ただ2024年度は、相談室が設置されている「教育学部附属子ども発達臨床研究センター」の改修工事があり、2024年4月から、相談室、相談室事務室および講座教員室を移転する準備を始め、改修スケジュールの確定が遅々として進まぬ中、既存ケースの相談業務を時限的に停止し、新規受付は行わないなどの対応を行ってきた。7月半ばになって相談室の物品移転が完了したが、その後、電話移設など相談室機能を再開するまでには時間を要した。最終的に10月以降の相談室再開となったため、2024年度の報告は以下に示すように、例年とはかなり異なるものとなっている。

1. 2024年「臨床心理発達相談室」活動実績

「臨床心理発達相談室」が開室した2011年4月から2024年12月までの、相談件数の推移を図1に示す。

* 北海道大学大学院教育学研究院教授

相談件数は2011年のみ4月から12月、2012年度以降は1月から12月の活動実績をまとめている。継続は、受理面接（新規ケース）後、継続面接が1回以上ある場合を、継続ケースとして扱うことに変更はない。

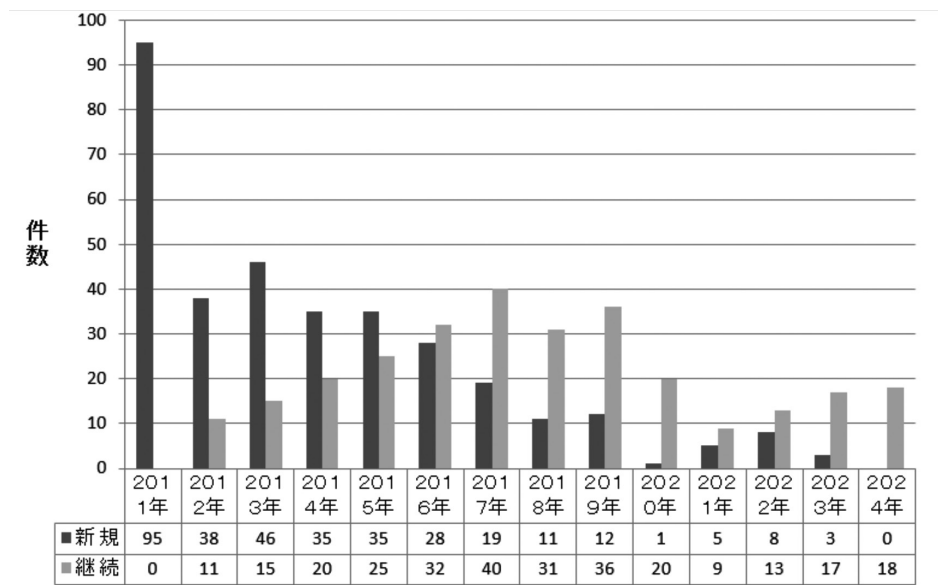


図1 相談件数の年次推移（単位：件）

当相談室の運営として、受理面接は研修生が陪席する場合もあるが、相談員が主担当となり、受理面接後に相談員の判断のもと、利用者の方の合意が得られた場合、研修生が利用ケースの主担当を担う流れとなっている。つまり院生が担当することとなる。主訴によってはやはりそのまま相談員が担当する場合もある。図1に示す2024年の状況は、子ども発達臨床研究センターの改修工事とそれに伴う相談室の移転のため、新規ケースはなく、継続ケースも2023年度と同様となっている。

例年報告している「新規ケースの紹介元別集計」（表および円グラフ）、「新規面接年代別の推移」は新規ケースがないため、今号での報告はない。また、「主訴分類の年次推移」も新規ケースがないため、2023年度と変化しておらず、今号での報告はない。

2. まとめ

2024年は、子ども発達臨床研究センターの改修工事があったため、実質的に相談業務は大きく縮小された。対面相談に戻ったにも関わらず2023年度とほぼ同じ件数となった。本稿を執筆している2025年2月3日時点で、改修工事は最終工程の進捗中であり、子ども発達臨床研究センターでの相談室再始動は3月初めとなる。令和7年度は改修が完了した新たな相談室で、今後の心理臨床の若き担い手の養成と地域で心理的困難に陥っている方々の支援を進めていきたい。